

何休の夷狄觀について

—「進」を中心として—

田中麻紗巳

何休の三科九旨説の「異内外」では、衰亂の世は「其の國を内にし諸夏を外にす」るし、次の升平の世は「諸夏を内にし夷狄を外にす」るが、更に太平の世になると「夷狄も進んで爵に至る」とされる。小論はこの「夷狄進至於爵」(『公羊』何注、隱二)の「進」の語を手掛りとして、何休の夷狄觀を考察するものである。『春秋公羊傳』の何休注を基にし、始めにそこで使われる「進」の意味を調べ、次にそれをより細かく検討し、更に後漢の夷狄に對する見方を少し調べ、そして結論に至りたい。

一

『公羊傳』は華夷を嚴格に區別し夷狄を憎惡しながら、夷狄の諸夏への漸進的な移行も認めており、この移行は夷狄が諸夏の道、即ち諸夏社會がこれを中心に結合されている王道精神(王道主義)に精通することと可能とされ、だから逆に諸夏がこれを失えば夷狄視される、といわれている。⁽¹⁾『公羊』は夷狄を差別しながら、同時にそれを受容する姿勢も備えているらしい。⁽²⁾これを何休が繼承し、更に深めた現われの一つが「夷狄も進んで爵に至る」の句であろう。特に夷狄が「進む」ということの意味は、重要ではないかと思われる。

『公羊』で「進」が夷狄に關していわれるのは、二箇所しかない。その一つは隱公元年の、隱公が邾婁の君と盟約を結んだ記事についてである。傳は邾婁の君を「儀父」と字で記して褒めているとして、それは「其の公と盟するが爲なり」という。夷狄と同様に扱われることもある邾婁の君主が、賢なる隱公と盟を結ぶからなのだろう。傳は更に邾婁の褒むべきを述べ、そして「漸く進めり」という。陳立『公羊義疏』はここで莊公十年の州・國・氏・人・名・字・子の褒貶の七段階を擧げ、邾婁の君は名を記される段階だったが、進めて一段上の字にした、と解する。するとこの「進」は進め方になる。尙、莊公十年の經は、荆が蔡の軍を敗つて蔡君を獲えたというもので、傳は荆を國名の楚より一段下の州名と解している。

『公羊』の他の一個所は、昭公二十三年で、吳が頓・陳などを敗り陳君を獲えたとする記事についてである。夷狄が中國の君を「獲」えるのを、『公羊』は認めない(莊一〇)。だがここで夷狄の吳が中國の君を獲えたと記すので、傳は「吳、少しく進めり」と説明する。この戦いは期日や場所を決めて互いに相手を許くことなく行なわれる偏戦のように記されており、傳の中には「中國も亦た新たな夷狄なり」という句もあるので、偏戦をなしうる吳が相對的に少し進んだことに

なり、従つて中國の場合と同様に「獲」の語の使用をゆるされるのであろう。

『公羊』の夷狄に關する「進」には、進めることと進んでいることを表わすものがあつた。そして進めるにはその理由となる進んでいる點が、進んだ場合はその結果としての進めることが、それぞれ用意されてゐた。つまり「進」には進めることと進んでいることが、表裏をなして含まれてゐるのである。

何休は『公羊』のこの「進」を受けて、隱公元年では、「去惡就善曰進。譬若隱公受命而王、諸侯有信始先師之者、當進而封之、以率其後」という。やはり進んだから進めるのである。そして進むとは惡より離れ善に近づくことと規定される。この場合は、傳が隱公と盟したからとしかいわず、やや不明瞭なのを、始めて盟したと補い、しかも、天命を受けた王者に、他の諸侯の模範となつて率先して歸服するよき行爲に、擬してゐる。昭公二十三年の注では、「能結日偏戰、行少進。故從中國辭治之」という。正しい戦い方をしたのが少し進んだ行爲だと、明言されてゐる。

夷狄に關する何注の「進」は、この他におよそ二十一個所で見られる。それらについて調べてみたい。哀公十三年の、哀公が黃池で晉君と「吳子」とに會したという經を、傳は吳に「子」を付けたのは、吳が會を主宰したからとし、しかし「夷狄の中國に主たるを與さず」ともいつてゐる。これを受けて何休は諸夏の國が夷狄に屈服するのを諱んで、經は吳が力でなく禮に依つたかのように記したとして「使若吳大以禮義會天下諸侯、以尊事天子。故進稱子」という。禮を守り天子を尊ぶのが、進むことの内容とされる。尙、この個所の『穀梁傳』は「吳子、進めるかな」「吳、進めり」「吳、進めり」と吳を稱えてゐる。

何休の夷狄觀について

傳のない例では、まず哀公十一年の、齊と吳が戦つて齊が敗れ、吳が齊の大夫を「獲」えたという經で、注は先の昭公二十三年と同様に、吳が偏戰をした點を少し進んだとする。「不與夷狄主中國」といいながら、「言獲者、能結日偏戰、少進也」といつてゐる。莊公二十八年の「丁未、邾婁子瑣、卒す」と日付けもある經では、注は「日者、附從覇者、朝天子、行進」といつてゐる。覇者に従い天子を朝するのを進んだと解してゐる。又、僖公七年の「小邾婁子、來朝す」の經の注も「至是所以進稱爵者、時附從覇者、朝天子、旁朝罷、行進」となつてゐる。

以上は戦い方を含めて禮を守り、天子を尊び、覇者に従うことを「進」んだとする例だつた。だが次に調べるのは、更に意味が込められてゐる。宣公十五年の經に、晉の軍が赤狄の潞氏を滅ぼし、「潞子の嬰兒」をつれ歸つた（嬰兒は潞子の名）とある。傳は「子」を付けた點を取り上げ、潞の君は「夷狄を離れるも、未だ中國に合する能わず」、つまり不十分なので亡びたが、「潞子」と記すのがよいという。その意圖を重んじてゐる。何休はこれを受け「疾夷狄之俗而去離之、故稱子」「以去俗歸義」、故君子閔傷進之」といつてゐる。夷狄の俗を疾みこれより離れ去つて、中國の義に歸服しようとした意志を評價してゐる。莊公二十三年の經に「荆人」が來聘したとあり、傳は初めて聘することができたので「人」を付けたとする。注は「春秋王魯、因其始來聘、明夷狄能慕王化、脩聘禮、受正朔者、當進之。故使稱人也」といつてゐる。傳は聘という形式に注目するだけだが、何休は夷狄が中國の天子の徳化を慕つたと、その内面まで汲み取ろうとする。但し何休は、楚ではなく荆と書かれてゐるのを、「許夷狄者、不一而足」といつてもゐる。この經には『穀梁』の傳もあり、「善、累なりて後に之を進む」といつて、更に、夷狄にとつて難しい聘を一度でもなしたと認め

て「人」と記した、と解するようである。僖公二十九年では「介の葛盧、來たる」という經を、傳は「朝す」と記さないのは、夷狄の君が朝することができないからと解す。これを注は「不能升降揖讓也」と説明する。だが續けて葛盧を名だとして「進稱名者、能慕中國朝賢君、明當扶勉以禮義」という。これは傳にはない何休の解釋である。進めて名を稱するのは、あの七段階で人を付けるのより一つ上の褒め方になる。その進んだ點は、中國を慕い中國の賢君を禮に合わない仕方ではあつたが朝したことである。何休は形式ではなくその心を重視している。

傳文のない例を見ると、まず昭公五年の楚や蔡などの君に「越人」も加わつて呉を伐つたと記す經で、何休は「越稱人者、俱助義兵、意進于淮夷。故加人以進之」という。同じ四年に楚君などの諸侯が會合し、續いて呉を伐つたとする記事では、諸侯の中に「淮夷」も加えられている。これにも傳はないが、注は楚君が義を行なつたので、楚と同類の淮夷も中國と同様に記した、という。中國並に扱われたこの淮夷より、五年の「越人」は「人」を付けて進められた記述であり、それは「意」がより進んでいるからと何休は解するのである。その具體的な内容は不明だが、意志を評價するのは間違ひあるまい。莊公十六年の經に「邾婁子克、卒す」とある。孔廣森『公羊通義』はこの克を先の隱公元年の儀父だという。そして何休は「小國未嘗卒而卒者、爲慕霸者、有尊天子之心、行進也」と注する。夷狄と同様に見られもする小國の君が、中國の覇者を慕い天子を尊ぶのを、進んだと判定している。この經には『穀梁』の傳があり、「其の子と曰うは、之を進めるなり」となっている。何休が「卒」の語に注目するのに、『穀梁』は「子」を取り上げて違つているが、進めたと見るのは同じである。

以上はやはり禮を守り、天子や覇者を敬することを「進」の内容としながら、同時にその意志や心情を重視する例である。『公羊』も夷狄が中國と合一しようとする意志を重んじる(宣一五)。だが君主自身が禮を履んで朝しえないことを指摘し(僖二九)、夷狄をそのようなのと見ている。これを何休は「中國を慕」っているのだから、むしろ禮に合うようにはげますべしという。そして「王化を慕」い「覇者を慕」うこともいう(莊三三・一六)。これらは中國の王化・覇者に對してだから、中國を慕うことの個別的な現われと解せよう。更に中國の義に歸服するのも(宣一五)、中國を慕う結果と見られよう。つまり何休は、夷狄が中國の禮を守り、天子・覇者を尊ぶ心の底に、中國を慕う氣持ちがあるはずだ、とするようである。これは何休の新しい解釋であろう。もちろん彼も夷狄を厳しく中國から區別し(莊二三、哀一一・一三)、この點は『公羊』と大差ないようである。が夷狄への理解は『公羊』に比して深められているのは、間違ひあるまい。

何休が夷狄に對し『公羊』より深い理解を持つのは、もともと夷狄の「進」を多くということ自體に示されている。ところがこの「進」は、『公羊』より『穀梁』に多くあり、およそ七個所でいわれる。これまで觸れた三個所、何注も「進」が説かれる個所では、まず『穀梁』が夷狄を全面的に稱える例で、『公羊』は部分的にしかこれを是認せず、何注は『公羊』の方に従つていた(哀二三)。だが『公羊』が禮の修得を取り上げるだけなのに、何休は心の内部まで考慮するのは(莊二三)、『穀梁』が禮を修得するまで努力を積んだと解するのから、示唆されたとも考えられよう。更に『公羊』の傳のない個所では、經のどの文字に據るかの違いはあるが、何注も『穀梁』も共に褒めていた。あるいはこれは、何休が『穀梁』と觀點を違える措置を講じた上

で、その評價を『公羊』の注に採用したのかもしれない。そして後述のように『穀梁』の「進」めるとする説を取ったとしか考えられない個所もある(傳一八)。全體として何注には、他傳の説を取る傾向が少し見える。⁽⁷⁾『穀梁』の夷狄觀は、その「進」の考えも含めて、一つの問題であるが、少なくとも、何休が夷狄の意志や心情にまで理解を及ぼす契機として、『穀梁』の「進」もあつたと解されよう。

二

夷狄は諸夏を伐ちこれを滅ぼす危険もある恐るべき存在である。だから夷狄が逆に諸夏を救えば、高く評價されるに違いない。しかし哀公十年の、楚が陳を伐ち、呉が陳を救つたという經について、何休は「救中國不進者、陳、吳與國、救陳欲以備中國、故不進」という。中國内の一國を救つても、中國に備える意圖からなら、評價できないとするのだから。

僖公十八年の一月に宋が衛などと齊を伐ち、夏には魯が齊を救い、五月に宋が齊と戦つて齊が敗れ、更に狄が齊を救い、冬には邢と狄が衛を伐つたという五條の經がある。『左傳』によると、前年の十二月に齊の桓公が死に、世継ぎの決め方があいまいだったので、五人の公子が君位を争い、宋が桓公から以前に頼まれていたその一人を助勢して齊を攻めた事件を中心とするもので、宋君は泓の戦いで知られる襄公である。この五條の全てに『穀梁』の傳があり、一月で喪中の齊を宋が伐つたのを非とするのを始めとして、一貫して宋を難じ他國が齊を救うのを褒めている。『公羊』は五月の經にだけ傳を附し、そこで齊が亂れていたので襄公が伐つたとし、彼を支持している。⁽⁸⁾つまり『穀梁』と『公羊』とは相反する解釋を下すのである。

何休の夷狄觀について

これについての何休の『穀梁廢疾』の文が『穀梁』范寧注に引かれている。まず五月の經の記し方を、『穀梁』は宋を惡んだものとするので、何休は宋を正しいとする書き方だといひ、『穀梁』は他の個所の傳の解釋と一致していない、と批判する。⁽⁹⁾次いで冬の經について、『穀梁』は衛を伐つたのは齊を救う爲だと解するので、何休はそれなら他の個所と同様に、經は衛を伐つて齊を救つたと記すはずだ、といふ。⁽¹⁰⁾

ところが『公羊』の注になると違つてくる。冬の經は「邢人・狄人、衛を伐つ」というもので、傳はない。この何注は「狄稱人者、善能救齊。雖拒義兵、猶有憂中國之心。故進之。不於救時進之者、辟襄公不使義兵壅塞」となっている。衛を伐つのは齊を救うこととされる。一月に衛も宋と共に齊を伐つているので、『穀梁』は衛を伐つて齊を救つたと解したのであるが、それを『廢疾』で難しながら、何休は『公羊』の注では肯定する。そして狄は中國を憂えたので進めて「人」を附けたと、その行爲を評價する。少なくとも、「齊を征し中國を憂える」(傳九、何注)とその功績を稱える宋襄と、等置しようと見なすのだから。その上、實はこの個所の『穀梁』の傳文は「狄、其の人を稱するは何ぞ。善、果なうて後に之を進む。衛を伐つは齊を救う所以なり。……」となつているのである。何注が『穀梁』の「進」めるとする説を踏まえるのは明らかである。但し、踏まえただけでは『公羊』の注として失格なので、何休は前の「狄、齊を救う」の經が「狄人」とはなつていないのに着目し、救つたと明言されている時に進めないで、宋襄の義兵も成り立たせている、と述べる。二傳の相反する説を巧みに両立させている。⁽¹¹⁾

夷狄が中國を救つても、中國に對し備える爲からであれば進めず、

逆に中國を伐つても、中國を憂える心からなら、たとえ義兵に抵觸しようとも、評價して進める。ただ何休も宋襄は齊を征伐し中國の亂れを憂えたといっていた。大國齊を安定させ、中國内の秩序維持を圖つたのは、覇者の行爲に近いと評價するのだから。だがそれでも何休は喪中を攻撃する非禮は看過できず、そしてこの非禮を正した夷狄を、中國を憂えたものと解し、褒めるのである。

ところで惡より離れ善に就くのが「進」とされていたが、この定義に適合するのは、宣公十五年の例で、そこでは夷狄の俗習が惡で中國の道義が善とされている。又、隱公七年の經に戎が凡伯を伐つてつれ歸つたとあり、その傳の中の「夷狄の中國を執るを與さず」の注に「中國者、禮義之國也。執者、治文也。君子不使無禮義制治有禮義」とある。華夷を禮義の有無で區別している。するとやはり夷狄がその俗習を離れ中國の道義・禮義を修得するのが「進」になる。だが次のような例もある。

定公五年の經に「於越、吳に入る」とあり、傳は越と於越の違いを、國名が中國に通じているか否かによるといい、何休は「越人自名於越、君子名之曰越。治國有狀、能與中國通者、以中國之辭言之、曰越。治國無狀、不能與中國通者、以其俗辭言之。因其俗可以見善惡」という。現地の俗稱で記されるか否かで、善か悪かがはっきりする。だが、國內が治まっているかどうかは、善惡で判断できなくもなからうが、中國と通交しているかどうかは、善惡とかわりなからう。通交するのまで善に入れるのは何故だろうか。

もともと何注における善惡は、全體として他の事柄や條件などと勘案される相対的なもので、その範圍は廣いらしい。従つて夷狄に關しても、その惡から善にいく「進」の内容は、幅廣いことにな

る。

前節で中國の禮を守り、天子・覇者を尊ぶのが「進」だと明らかになったが、細かく見れば、前者と後者はやや異なる。夷狄が中國の禮を修めた結果、非禮なる天子・覇者に對抗することもありうるからである。すると禮の方がより重要になる。だが禮にはずれても、中國を慕う心から出た行爲なら、進んだとされた。中國を慕う心は更に重要になる。そして中國を憂える氣持ちからなら、中國を伐つても進んだとされた。夷狄の「中國を憂える心」を説くのは『公羊』である。しかし、敬慕の念があつて始めて憂慮の氣持ちが起るとも考えられるので、何休は更に深めて、憂える心の奥に慕う心を想定したと解せないだろうか。又、中國と通交しうるのも、慕う心があつてこそ可能だ⁴⁴と見て、善としたのではなからうか。

すなわち、何休の説く夷狄の「進」は、内容の廣いものであった。それは中國の禮の修得やその統治者への服事への他、中國との通交も含むと推測された。そしてこれらの事柄の根底に中國を慕う心の存在を、何休はやはり求めたようである。

三

班固は『漢書』匈奴傳の贊で、前漢では夷狄への對策として和親と征伐とが説かれたが、いずれも偏つたものだという。そして蠻夷を制する常道として彼が述べるのは、要點を記すと次のようになる。先王は王畿を中心にして遠近に合わせ制度を定めた。そこで『春秋』も諸夏を内にし、夷狄を外にしている。夷狄は貪欲で人面獸心であり、習俗・言語など全てが中國と異なる。だから聖王は夷狄を禽獸のように扱い、盟約を結ばず、攻伐もしない。夷狄を外にして内にはせず、疏

んじて近づけないのである。中國の政教や正朔は夷狄に及ぼさず、これが攻めてくれば懲らしめ、去つても備えをおこたらず、義を慕つて貢獻してくれば、禮讓をもつて交わるが、よこしまな點は夷狄にあるようにさせた。

夷狄は風俗や言語だけでなくその本性も中國の人と異なり、獸の心だと見られている。だから禽獸と同様に對處すべきで、あくまでも中國の外に位置づける。たとえ中國に朝貢してきても、心を許さず、距離を保つて交際するに止どめる。このような夷狄の理解とそれへの對應の仕方は、もちろん前漢以來、後漢前期までの、中國と匈奴等の周邊異民族との深刻な對立を背景に持つものである。又、匈奴討伐に従軍もする班固自身の個人的な見解という面もあるかもしれない。それはともかく、このような考えに類するものは、後漢では他にも見られる。

順帝の永和元年（一三六）、武陵（湖南省常德縣附近）の太守が上書して、蠻夷が服従しているので、漢人と同じように年貢を増額すべしと説いた。漢代には邊境やこれに近い地域で、漢人と異民族とが雜居する所もあつたらしい。多分、漢人と異民族との激しい對決と共に、他方では、年代が下るにつれ、前者は生活圏を外に廣げ、後者は中國の内部に移り住んでいく傾向にあつたのだろう。和帝の時、郡の人口當りの孝廉の數が朝廷で取り上げられ、蠻夷も居住する土地はどうするかが論じられたのも（後漢書本紀四、列傳二七）、こうした實狀を反映していると思われる。さて、武陵の太守の上書は、討議の結果、可とせられたが、『尙書』に通じていた尙書令の虞翻だけが反對意見を述べた。彼は「古より聖王は異俗を臣とせず。徳の及ぶ能わず、威の加うる能わざるには非ざるなり。其の獸心にして貪婪、率びくに禮を

以てし難きを知ればなり。是の故に羈縻して之を綏撫し、附けば則ち受けて逆わず、叛けば則ち棄てて追わず。……」といつて増稅案は怨みと反叛を召くので得策ではないことを説いている（同、列傳七六）。貪欲で獸の心の夷狄には中國の禮は無効だから、家畜を束縛した上で慰撫するようにこれを扱ひ、附き従うなら受け入れ、叛けば放置すべしとされている。

靈帝の中平八年（一八五）、三輔（陝西省中部）の地を賊が異民族と共に荒らし、これを伐つ爲に鮮卑などの異民族から兵を募ることが宮廷で論じられた。そこで『風俗通』等の著者である應劭は、漢に歸服している他の種族から精兵を選ぶべきを主張した。その意見の中に『鮮卑は隔たりて漠北に在り、犬羊のごとく群を爲し、……唯だ互市に至りては、乃ち來たりて靡服す。苟くも中國の珍貨を欲するにて、威を畏れ徳に懷くには非ざるなり。計、獲て、事、足らば、踵を施らせて害を爲す。是を以て朝家は外にして内にせず、蓋し此れが爲なり』（後漢書列傳三八）とある。中國の權威や徳を無視し、ただ利を求めて中國と交わるだけの異民族は、後漢王朝はこれを中國の内側に受け入れない、という。ここでは班固も使っていた「外而不内」の語が、もはや「朝家」の政策とされている。

すなわち、後漢には夷狄を禽獸視したり、これを中國の外に止どめようとする主張があり、しかも兩者は相伴つて説かれるようである。前者は古くからあるものだが、兩漢では、後漢でやや目につく。あるいは後漢が禮教的な文化社會だったので、相對的に異民族を蔑視する傾向が強かつたのだからか。又、後者は『公羊』の「諸夏を内にし夷狄を外にす」る段階に止どまるものである。だからこの段階から前進するのは、前者のような夷狄への理解のままでは、困難ではなからう

か。

後漢王朝に脅威を與えた周邊異民族は、後期では羌であつた。⁽²⁰⁾張奐は『尚書』を學んで桓・靈帝期に活躍し、光和四年(一八二)に七十八歳で没した人物である。本傳『後漢書』列傳五五)によると、彼は異民族に對して和戰兩様の融通ある對應をしている。段熲は張奐と同時期の人で、羌を征伐して多くの功績を擧げた武の人である(張奐と合傳)。靈帝建寧元年(一六八)、段熲は東羌を大破し、その殘兵が僅かになつた時、張奐は招降を上言した。段熲は誅滅を主張してこれに反論するが、その中に張奐の言が「羌も一氣の生ずる所なり、誅し盡くす可からず」と引かれている。

この張奐の語の續きに「血、流れて野を汚さば、和を傷り災を致さん」ともある。するとこの語は、羌は漢人とは違ふ別の氣からなる者だが、絶滅してはいけない、というのだから。張奐も異民族を漢人から區別しており、あるいは本質的には禽獸視していたかもしれない。だが、危険な動物を殺し盡くすような措置を、異民族にとることには反對するらしい。その方が永い目で見て漢に有利だという意味もあるが、同時に禽獸並にだけ扱ふのでは正しくない、とする意識もあつたのではなからうか。とにかく、他にはほとんど見られない張奐のよきな考へも、後漢にはあつたのである。そしてこのよきな考へ方に、夷狄を外にする段階から更に進みうる可能性が、含まれているのではなからうか。

四

明帝の時、西羌の一種族が他の種族に攻撃され、漢の統治下の地を頼つて來た。だが彼等はそこでしばしば法を犯したので、臨羌(青海

省西寧縣西)の長はその指導者を收撃し、その種族六、七百人を誅殺した。明帝はこれを憐んで詔を下し、彼等の優遇を命じた。その詔勅の中に「昔、桓公、戎を伐ちて仁惠無し。故に春秋は貶して齊人と曰う」とある(『後漢書』列傳七七)。これは『公羊』莊公三十年に見える。經に「齊人、山戎を伐つ」とあり、傳は「人」と稱して貶したとし、又、對等の者同志の戦いを示す「戰」の語も用いないという。齊桓は山戎よりはるかに強かつたのである。これを説明した何注に「戎亦天地之所生、而乃迫殺之、甚痛。故去戰貶見其事、惡不仁也」とある。これはあの張奐の「羌一氣所生、不可誅盡」の語を想起させる。彼は何休より二十五歳年長だが、没年は何休より一年早いだけである。

當時あつた張奐のような考へから、何休は影響を受けたのではなからうか。ただ彼の注には「不仁を惡む」ともあり、張奐よりはつきりと道義的に夷狄を考慮すべきを説いている。朝廷への上奏文と經傳の注との違ひを越えて、そう解される。けれどもこの何休の言を、直ぐに暖かい人道的な態度と見るのは早計だろう。僖公九年の經に伯姬が卒したとあり、同十四年には季姬が鄆の君と防で遇い、鄆君を來朝させたとある。『公羊』は季姬が鄆君に自分を請わせた、とだけいう。『通義』は伯姬が邾婁と婚約し、季姬はその媵だったが、伯姬が死んだので彼女が邾婁に嫁していく途中、邾婁と同じく魯に近い鄆の君と防で遇い、季姬は彼に好意を抱いて自分を請わせ、僖公も許可したという。そして翌十五年の經に季姬が鄆に歸いだとある。何休は十四年の注で「魯不防正其女、乃使要遮鄆子淫泆、使來請己、與禽獸無異。故卑鄆子使乎季姬、以絕賤之也」という。「禽獸と異なる無し」というのは、何注には他にほとんど見られない、嚴しい表現である。

昭公二十年の注に「叔術功惡相除」とある。同三十一年の傳による

と、邾婁の君の顔が國を亂し天子に誅せられ、弟の叔術を立てられた。彼は顔に直接手を下した者を殺すことを切望する美人の嫂の願いを果たし、彼女を妻とする。しかし彼女と顔との間の子が成長すると、叔術は自分と彼女との間の子がありながら、願の子に國を讓る。『公羊』は叔術の嫂を娶ることに難色を示すが、その讓國する點は賢と稱える。つまり「叔術の功惡、相除く」とは、讓國の功と、顔を殺させた天子の處置に間接的ながら反抗して嫂を妻とする惡とが、相殺されるというのである。

同じく男女間の事柄、人倫上の問題を含みながら、叔術の惡は功により相殺され、季姬は強く非難される。むろん、叔術の功は讓國という表彰するに値する至難の行爲だったからだろう。だが季姬が禮に背いて鄆君に嫁するのに較べ、叔術が間接的だが天子の措置に逆ってまで嫂を娶るのは、小さな惡だといえなからう。すると叔術と季姬等とに對する何休の判斷の差異は、別の理由によるところもあるのではなからうか。

一體、叔術の邾婁は、魯の近くに位置する小國だが、前述のように夷狄並に見られることもありながら、魯とも婚姻關係を持ち、諸夏のように扱われる。『公羊』や何注において、夷狄視されることもある諸夏、とでも呼べようか。他方、季姬の魯はいうまでもなく、鄆も傳・注で夷狄とはされず、いずれも諸夏の國である。この違いが原因するのではなからうか。つまり、類似した非難さるべき結果を引き起こしても、諸夏である季姬等には嚴しいが（二の宋襄の非禮を看過しない嚴しさも同様だろう。諸夏としての責任、これと表裏をなす矜持、が推測される）、純然たる諸夏とは扱われず夷狄視もされる邾婁の叔術に對しては、別の事柄である功によりそれを打ち消す、という面もあるよう

に思われる。それに前漢の文帝の時に匈奴に降った中行説に、漢の使者が匈奴の風習を難した言葉の中に「兄弟死なば、盡く其の妻を取りて之を妻とす」とある（『史記』卷一〇〇）。叔術と嫂とのことをこのように見る意識も、何休にはなかつたであらうか。

叔術には「禽獸と異なる無し」などといった言葉が與えられないだけ、逆に深い侮蔑の意が込められているように思える。だが同時にこれは夷狄への配慮も示すのではなからうか。もともと何注には夷狄を禽獸視する言辭はなかつた。だから彼は諸夏の一員として夷狄の「禮義無き」（隱七）點を輕侮しながら、又、夷狄が中國の「禮義」を修得しうる可能性などを、認める必要もあると考えたのではなからうか。彼は夷狄の性質は淺薄なので、中國の禮をにわかには備えられない、ともいうが、これも「率びくに禮を以てし難き」（虞翻）ものといわば突き放すのではなく、段階的なら中國の禮を及ぼしうるとするのだから。そして「天地の生ずる所」である夷狄を迫害することも、夷狄を嫌惡すると否とにかかわらず、道義的には正しくないというのだから。このように夷狄を配慮し考慮することが、その中國を慕う心を何休に認めさせているのではあるまいか。尙、叔術の功と惡とが相殺されるのは、惡を去り善に向う夷狄の「進」の範圍の廣さを傍證する一つにもなる。

ところで、『公羊』莊公十年の褒貶の七段階を述べた個所で、傳の「夷狄の中國を獲るを與さず」の注に「夷狄謂楚。不言楚言荆者、楚疆而近中國、卒暴責之、則恐爲害深。故進之以漸」とある。楚を難じたいが、近接する強國で危険なので、進めるけれどもそれは漸次にである、という。ここでは楚の強さとその害が、危懼されている。僖公四年の經に「楚の屈完、來たりて師に盟し、召陵に盟す」とある。傳

は齊桓が夷狄の楚を屈服させたと解し、その覇者ぶりを稱えている。この何注に「累次桓公之功徳、莫大於服楚。明德及強夷、最爲盛」とある。強力な夷狄を中國に服従させるのは、この上ない功業である。だがそれだけ強い夷狄は中國にとって脅威だったことになる。

ではこのように夷狄を恐れこれを屈服しようとするのと、夷狄を配慮し考慮することとは、どう結びつくのだろうか。昭公元年の經に「晉の荀吳、師を帥いて狄を大原に敗る」とある。「大原」は『左傳』だけが「大鹵」となっており、『穀梁』は「中國は大原と曰い、夷狄は大鹵と曰う」という。『公羊』は大鹵なのに大原と記したわけを、地物を中國に従う」といい、注は「以中國形名言之」という。夷狄の地を中國の地形に合わせて呼ぶとする。傳は「上平を原と曰い、下平を隰と曰う」ともいい、この注は「分別之者、地勢各有所生。原宜粟、隰宜麥。當教民所宜、因以制貢賦」である。穀物の種類に適した地勢を呼び名で分けあらわし、民に教え、そして貢賦を確保しようとするのだろうか。何休は夷狄の地も年貢等の對象と考えていることになる。

これは二で觸れた於越と越との違いを述べた箇所(定四)を説明するのではなからうか。そこで何休は夷狄が中國と通交することも善とし、國名を中國の言葉で呼ぶと云っていた。通交まで善に入れその範圍を廣げるのは、通交を求めるからであり、大原の例を考え合わせるのと、通交による利が考えられたからではなからうか。つまりこの「通」は通商も含むのではないかと思われる。この場合の「善」には、交易などで互いが經濟的に結びつくことも入るだろう。順帝の時、漢人と雜住する異民族への税を増そうとしたが、當時こうした考えもあつたのである。これに對し虞詡は反對した。彼は異民族を禽獸視したが、

又、これから利を收奪する意圖も持たなかつた。他方、何休は夷狄からの收税を考え、通商の行なわれるのを進んだと見るようだった。彼には夷狄に利を求める姿勢が窺える、といつてもよからう。

さて、中國にとって脅威である夷狄は、強ければ強い程、逆に中國の側に彼等が屬したなら、この上なく頼もしい存在にならう。古くから諸夏は夷狄の戰爭での強さを採り入れてもおり、又、漢代にも歸順した異民族を戰鬪に使う例があつた。とすると、一方で何休が夷狄を恐れながら、同時にこれを配慮し考慮するのは、強力な夷狄が中國と同盟する利が考えられた結果でもなからうか。中國の利の爲に夷狄を願慮する、という面も何休にあるように思われる。それに僖公四年の注には「明德、強夷に及ぶ」ともあつた。この傳は桓公が「夷狄を攘う」のを専ら稱贊するのに、何休は桓公の徳に強暴な楚が服したとも見る。中國の徳に夷狄が心服するという形を、何休は願つたのだから。一般に夷狄を力で服従させるより、好意ある對應で自發的な協力を得る方が、効用は大きいに違いない。この點も何休は認識していたのではなからうか。更に夷狄の側からいつても、「中國の珍貨を欲す」(應劭)る立場から、中國と通交し交易するのは、利のあることだったに相違ない。その中國を思慕する氣持ちの中に、中國の文化・文明の恩恵に浴する目的、ひいては中國の軍事力に頼る功利的な意圖があつても、何休には差し障りはなかつたであらう。むしろ彼は夷狄にとつての利も計算に入れたのではなからうか。

何休が夷狄の中國を慕う心を認めたのは、道義上及び實利の上からの要請によるのであり、かつ、夷狄にとつての利も勘案されると考えられた。尙、これらは何休において恐らく矛盾なく併存したと思われらる。中國的な思惟は利害と當爲との區別に、嚴密ではなさそうだから

である。これら幾つかの要因から中國を慕う心は成り立っており、この心を根底として夷狄は「進む」とされたのである。こうした考えが組立てられるには、當時の異民族を配慮する考えからの影響があつたらうし、更に『穀梁』の「進」の説が據り所とされたであらう。

さて、何注におけるこのような「進」の考えは、その「夷狄も進んで爵に至る」ということを支えている、と見てよからう。するとこの句を中心とする考えは、華夷・内外の差別を消滅させて、天下に君臨する漢王朝を絶対化する観念的な圖式、と解するだけでは不十分になる。確かにこの句の後には「天下の遠近小大、一の若く」と続く。夷狄も中國の爵位を與えられ華夷の區別のない状態を指すように見える。けれども何注には華夷の一體化を説く態度はあまり目立たない。想像するに、何休は華夷の差異を必ずしも撤廢できるとは見なさず、従つて夷狄の風俗・文化のそれなりの評價も必要と考えていたのではなからうか。だがそれはともかく、少なくとも何注における幅の広い「進」の内容を参考にして、その太平の世の描寫の意味も、検討してみることがあらう。その際、彼に當然のものとして頌漢の考えがあると共に、後漢の次を眺望する姿勢が少し窺えたことも、參酌できるに違いない。

小論は何注における衰亂・升平・太平の三世區分の考えから、敢えて離れて考察をした。三世區分の設定は、何休の公羊學の内でも重要な意味を持つし、だから従來、これに専ら基づいて彼の思想を説明する傾向も少しあつた。だがこれのみに注目し、何注全體の丹念な吟味を疎かにすることは、危険ではないかと思われる。無論、小論の結果を、三世區分の説との関連で更に廣く検討することは必要であらう。

今後の課題である。

注(1) 中江丑吉「公羊傳及び公羊學に就いて」(『中國古代政治思想』所收) 三六三頁以下參照。

(2) 戰國期を中心に形成された華夷思想は、禮を基準に華と夷とを差別するが、華と夷を差別することの中に、夷を華に近づけつつ包攝して行こうとする論理を内包していた、と小倉芳彦氏はいう。『中國古代政治思想研究』三二八・九頁參照。

(3) 邾婁が「公羊」で夷狄視されるのは桓公十五年その他であることを日原利國「春秋公羊傳の研究」二四五頁は指摘する。

(4) 『義疏』の解釋によると、「旁朝龍」は天子に朝するのが終つて次に魯を朝したことらしい。

(5) 『穀梁』は「其の人を曰うは何ぞ。道を挙げれば再びするを待たず」と続く。そしてこの范寧注は「明らけし聘問の禮、朝宗の道は、夷狄の能くする所に非ざること。故に一たび挙げれば之を進む」という。

(6) 小論では觸れない『穀梁』の「進」は三例で、それは次の如きものである。

襄公二十九年 經「吳子、札をして來聘せしむ」傳「吳、其の子と稱するは何ぞ。延陵の季子を使せしむるを善しとす。故に之を進む」

昭公十七年 經「楚人、吳と長岸に戰う」傳「楚子を進む、故に戰と曰う」

定公四年 經「蔡侯、吳子を以て楚人と伯舉に戰う。楚師、敗績す」

傳「吳、其の子を稱するは何ぞ。……吳、中國を信じて夷狄を攘う。吳、進めり」

(7) 拙稿「何休の災異解釋について」(『東方學』六〇輯所收)は、何注が「左傳」の説を取る例を擧げる。又、吉川忠夫「黨錮と學問——とくに何休の場合——」(『東洋史研究』三五卷三號所收)も、何休が「左傳」

を引くことのあるのを指摘する。

(8) 『穀梁』の僖公十八年の傳は、後に觸れる冬の個所を除くと、次のようになる。

經「正月、宋公・曹伯・衛人・邾人、齊を伐つ」 傳「喪を伐つを非とす」

經「夏、師、齊を救う」 傳「齊を救うを善しとす」

經「五月、戊寅、宋師、齊師と颯に戦う。齊師、敗績す」 傳「戦いに伐を言わず、客に及を言わず。及を言うは、宋を惡みてなり」

經「狄、齊を救う」 傳「齊を救うを善しとす」

(9) 『公羊』の傳は「……曷爲ぞ齊をして之に主たらしめざる。襄公の齊を征するを與せばなり。曷爲ぞ襄公の齊を征するを與す。桓公死し、豎刁・易牙、權を争いて葬らず。是れが爲の故に之を伐てり」となっている。

(10) 范注には「何休曰、戰言及者、所以別客主直不直也。故文十二年、晉人・秦人戰于河曲、兩不直、故不云及。今宋言及、明直在宋。非所以惡宋也。即言及爲惡、是河曲之戰爲兩善乎。又穀梁以河曲不言及、略之也、則自相反矣」とある。

(11) 范注には「何休曰、即伐衛救齊、當兩舉如伐楚救江矣。又傳以爲江遠楚近、故伐楚救江。今狄亦近衛而遠齊。其事一也、義異何也」とある。

(12) 皮錫瑞『釋廢疾疏證』は僖公十八年のこの個所で「劉、何注の、狄の齊を救うを善しとするを以て爲難す」という。これはここに引かれる劉逢祿『穀梁廢疾申何』の「此れを以て狄を進めて人を稱するは、是れ易きに趨り難きを避くるの略を開くにして、春秋の誠を責ぶの道に非ず」を指すのだから。これは直接には『穀梁』を難じたものだが、皮錫瑞は『穀梁』の説を採る何注を間接的に批判した、と解するのだから。尙、皮錫瑞自身は、何休が宋襄と狄との双方を評價するのを「何、已に自ら其の説を圓にし、兩つながら相い得げず」と解釋する。

(13) 鄭君が會盟から逃げ歸ったことを難じて「故言逃歸、所以抑一人之惡、申衆人之善」(僖五) といったり、霸者について「文公功足以并掩前人之惡」(同一〇)、つまり子の功業が父の惡行をおおいかくせるとしたり、「桓公功大、善惡相除」(同) といったりする注がある。

(14) 定公四年の傳が明瞭である。經は蔡の君が「吳子」と共に楚君と戦い、楚が敗れたとする。傳は伍子胥の楚への復讐をからめて説き、まず「吳、何を以て子を稱す。夷狄なるも中國を憂えり」という。更に楚に攻撃された蔡が吳に救援を求めてきたのに乗じ、伍子胥が吳王闔廬に説く言葉として「蔡、罪有るに非ず。楚人、無道を爲す。君、如し中國を憂うるの心有らば、則ち若の時、可なり」と見える。

(15) 「故に先王、土を度り、中に封畿を立て、九州を分ち、五服を列し、……是を以て春秋は諸夏を内にして夷狄を外にす。夷狄の人、貪りて利を好み、被髮左衽、人面にして獸心なり。其れ中國と章服を殊にし、習俗を異にし、飲食は同じからず、言語は通ぜず、……是の故に聖王、禽獸もて之を畜い、與に約誓せず、就きて攻伐せず、……是を以て外にして内にせず、疏んじて威づけず。政教、其の人に及ぼさず、正朔、其の國に加えず。來たらば則ち懲らしめて之を御し、去らば則ち備えて之を守る。其の義を慕いて貢獻せば、則ち之に接するに禮讓を以てし、羈靡して絶たず、曲をして彼に在らしむ。蓋し聖王の蠻夷を制御するの常道なり」(『漢書』卷九四下贊)

(16) 兩漢時代の漢と異民族との關係については、例えば栗原朋信「漢帝國と周邊諸民族」(『世界歴史』4所收) が要約している。

(17) 『羈縻』について『後漢書集解』は、應劭『漢官儀』を惠棟が引いて「馬には羈と曰い、牛には縻と曰う。四夷は牛馬の羈縻を受くるが如きを言う」というのを記す。

(18) 『左傳』には「戎狄は豺狼なり」(閔一)、「戎は禽獸なり」(襄四) と見える。尙、山田統「天下という觀念と國家の形成」(『共同研究』古代

國家』所收)、安部健夫『中國人の天下觀念——政治思想的試論——』
〔東方文化講座〕六) 参照。

(19) 後漢では班超が「蠻夷は鳥獸の心を懷き、養い難きも取り易し」(『後漢書』列傳三七)、魯恭が「夫れ戎狄は四方の異氣なり。蹲夷踰肆し、鳥獸と別つ無し」(同、列傳一五)とそれぞれいう例がある。尙、後漢の經學史の重要な資料である『白虎通』には、禮樂第六などに夷狄を差別する記述が目立つ。一例を挙げると、王者不臣第二十一に「夷狄は中國と域を絶ち俗を異にす。中和の氣の生ずる所に非ず、禮義の能く化する所に非ず」とある。

(20) 二世紀の始め以來、羌が猛烈な侵入を行ない、後漢王朝の財政は衰弱の勢を増したが、このことは『後漢書』より王符の『潜夫論』に精しい、といわれる(宇都宮清吉『漢代社會經濟史研究』九三頁)。尙、後述のように段熲は東羌の誅滅を説いたが、王符も『潜夫論』で貪欲な夷狄を撃滅すべしとする武斷的攘夷主義を述べ、といわれる(日原利國『王符の人間觀』、『池田末利博士古稀記念東洋學論集』所收。尙、同『王符の法思想』、『東洋の文化と社會』六所收にも同旨の論が見える)。こうした主張も當時あったらしい。但し、王符の夷狄觀の意味などは、別に考察すべき餘地があると思われる。

(21) ここで「道義的」というのは、當爲としてなさねばならない、の意である。次の「人道的」は、情愛の自然な發露、といった意味で使った。尙、桓公七年の「威丘を焚く」の經を、『公羊』は威丘は邾婁の邑で、始めて火攻めをしたのを疾むと解す。この何注に「故疾其暴而不仁也」とあり、これも道義上からの批判だと思われる。

(22) 諸夏と同じように處遇されるという意味に過ぎない。魯と婚姻したたら諸夏とされる、ということではない。僖公元年の「楚人、鄭を伐つ」の經の注に「楚稱人者、僖公諱與夷狄交婚。故進使若中國」とある。僖公は楚から夫人を迎えようとしている。

何休の夷狄觀について

(23) 前掲日原氏書二四六・七頁は、『公羊』が叔術の讓國を賞賛し、そこには華・夷の區別が全く感じられない、という。だがこれは何注のことではないし、視點も小論とは異なる。

(24) 『公羊』には「戎、衆くして以て義無し」(莊二四)、「楚は夷國なり。疆くして義無し」(僖二二)とある。この「義」を何休は「禮義」と引伸するのかもしれない。又、何注にはこれまでにも觸れたように、『公羊』の主張を踏まえ、いわゆる書法と結びつけて、夷狄を差別する記述が少なくないが、別の例を挙げると、襄公三十年の「蔡の世子般、其の君固を弑す」の經で「不日者、深爲中國隱痛有子弑父之禍。故不忍言其日」といい、文公元年の楚の「世子商臣、其の君甯を弑す」の經では「日者、夷狄子弑父、忍言其日」という。

(25) 文公九年の「楚子、椒をして來聘せしむ」の經を、傳は楚に始めて大夫が設けられたのだが、氏を記さないのは「夷狄に許すは一にして足らず」だといふ。この注に「足其氏、則當純以中國禮貴之。嫌夷狄質薄、不可卒備。故且以漸」とある。

(26) 何注には抑壓された民への配慮が少し見られる。例えば莊公十七年の經に「齊人、遂に瀆せらる」とあり、傳は「衆、成る者を殺す」といふ。齊が遂を伐ち、その後、齊兵が遂を制壓していたらしい。この何注に「齊人滅遂、遂民不安、欲去、齊強成之。遂人共以藥投其所飲食水中、多殺之。古者有分土、無分民。齊成之、非也。遂不當坐也」とある。又、『穀梁』の傳文をめぐって、他國の軍に包圍された國の人や民の安全こそ重視すべしと何休は主張し、鄭玄は樹木や家屋の被害の方が重大だと反論しているのが、『穀梁廢疾』『釋廢疾』に見える(拙稿「鄭玄『發墨守』等三篇の特色」、『日本中國學會報』三〇集所收参照)。こうした何休の姿勢は、その夷狄への配慮と、關係するのではなからうか。

(27) 趙の武靈王の胡服騎射は有名である。尙、『史記』卷四十三には、王の方針を批判する儒家的な言があり、これは漢代に入ってからの方針

思われるが、とにかく戰國期に夷狄の強さを中國が學んでいたのである。何注では諸夏が夷狄に就くのは強く非難され、その逆は高く評價される。例えば、僖公十四年の「蔡侯昫、卒す」の經の注に「不書葬者、潰當絶也。不月者、賤其背中國而附父讐、故略之甚也」とある。疏は「楚を謂いて父の讐と爲す」という。又、同二十八年の晉等と楚が城濮で戦って楚が敗れた記事で、傳は楚を批判するに止どまるが、何注は晉の側に「秦師」も記されているのを取り上げ「秦稱師者、助霸者征伐、克勝有功、故褒進之」という。中國に味方したことを評價している。同じく二十年の經の「齊人・狄人、邢に盟う」の注は「狄稱人者、能常與中國也」となっている。この狄を何休は「進」んだと見ている。注①参照。これらは夷狄が中國の側に立つことを強く望み求めることを示してもいよう。

(2) 小倉氏前掲書三三三・四頁参照。

(3) 前掲注(7)抽稿参照。

(4) 何注の夷狄の「進」を述べた個所で、三世區分と關連するのは、隱公元年の「夷狄進至於爵」の他に三つある。その一つは既に觸れた宣公十五年の個所で、一で引いた文の後に「名者、示所聞世始錄小國也」とある。經が潞子の「嬰兒」と名も記すのを、所聞の世だからといって。疏は僖公二十六年の經に、楚が陳を滅ぼし「陳子」をつれ歸つたとあり、注が「所傳聞世、見治始起、責小國略」というのと、對應するとし、そして「然らば則ち此の名を書するは、所聞の世、始めて小國を録すを示すなり」という。但し『通義』は「所聞の世、小國の君は猶お未だ名いわず。嬰兒と名いいうも、亦た行ない進めるを以て之を録す」という。次は成公七年で、經に「吳、郟を伐つ」とあり、傳はなく、注は「吳國見者、罕與中國交、至升平乃見。故因始見以漸進」という。吳が經に登場するのはこれが最初である。丁度、升平の世に當たり、しかも褒貶の七段階の六番目の國名でしか記されていないので、「漸く進めり」と説明したのでらう。残りは昭公十六年で、經には「楚子、戎曼子を誘

いて之を殺す」とあり、傳は「楚子、何を以て名いわざる。夷狄相誘くは、君子疾ます。曷爲ぞ疾まざる。疾まざるが若きは、乃ち之を疾めり」という。夷狄同士の抗爭だが、所見の世に入っているので、何休は「戎曼稱子者、入昭公見王道太平、百蠻貢職、夷狄皆進至其爵」という。但し疏は「上の四年、申の會に、吳を伐ちて淮夷を再見し、五年の冬、越人、吳を伐ちて越人を見す。所見の世なるに之を進めざるは、君子は事に因りて義を見るが故なり」という。

又、何注で「進」に觸れず三世區分と夷狄とを結びつけた個所は、あまりないが、次のような例はある。隱公二年の經に「公、戎に潛に會す」とあり、傳はなく、注に「所傳聞之世、外離會不書、書内離會者、春秋王魯、明當先自詳正、躬自厚而薄責於人。故略外也。王者不治夷狄、錄戎者、來者勿拒、去者勿追」と見える。ここで目につくのは、「夷狄を外する」以前の衰亂の世に、來れば受け入れ、去れば追わないとする點であらう。

尙、これまで全く觸れなかつた何注の夷狄に關する「進」は、あと三例ある。僖公二年に「齊侯・宋公・江人・黃人、貫澤に盟う」という經があり、傳は大國の齊・宋と遠國の江・黃とを擧げて、他の國々は、皆、出席したことを示すという。注には「江・黃附從霸者、當進、不進者、方爲偏至之辭」とある。襄公五年の經に「公、晉侯・宋公・吳人・鄭人に威に會す」とあり、傳は「吳、何を以て人を稱する。吳・鄭人と云わば、則ち辭ならず」とい、注には「方以吳抑鄭、國列在稱人上、不以順辭。故進吳稱人」とある。定公四年の經の「吳、楚に入る」の傳の「吳、何を以て子を稱せざる」の注は「据狄人盟于邢、有進行稱人」となっている。これは僖公二十年のことを指す。注②参照。

(小論は去る一月、清泉女子大學での公羊注疏研究会研究交流會で發表し、御批判を戴いて一部補訂し、その後更に加筆したものである。一九八二・四・五)